無上甚深章（五帖第十三通）

それ、南無阿弥陀仏と申す文字は・その数わずかに六字なれば、さのみ功能のあるべきともおぼえざるに・この六字の名号のうちには、無上甚深の功徳利益の広大なること・さらにそのきわまりなきものなり、されば、信心をとるというも・この六字のうちにこもれりとしるべし、さらに別に信心とて・六字のほかにはあるべからざるものなり、

そもそも、この南無阿弥陀仏の六字を・善導釈していわく、南無というは帰命なり・またこれ発願回向の義なり、阿弥陀仏というはその行なり、この義をもってのゆえに・かならず往生することを得といえり、しかれば、この釈のこころを・なにとこころうべきそ

というに、たとえば・われらごときの悪業煩悩の身なりというとも、一念阿弥陀仏に帰命せば・かならずその機をしろしめして・たすけたまうべし、それ、帰命というは・すなわちたすけたまえと申すこころなり、されば、一念に弥陀をたのむ衆生に・無上大利の功徳をあたえたまうを・発願回向とは申すなり、この発願回向の大善大功徳を・われら衆生にあたえましますゆえに、無始曠劫よりこのかた・つくりおきたる悪業煩悩をば・一時に消滅したまうゆえに、われらが煩悩悪業は・ことごとくみな消えて、すでに正定聚不退転なんどいう位に・住すとはいうなり、このゆえに・南無阿弥陀仏の六字のすがたは、われらが極楽に往生すべきすがたを・あらわせるなりといよいよしられたるものなり、されば、安心というも信心というも・この名号の六字のこころ

を、よくよくこころうるものを・他力の大信心をえたるひととはなづけたり、かかる殊勝の道理あるがゆえに・ふかく、　信じたてまつるべきものなり、

あなかしこ　　あなかしこ

無上甚深章の大意

南無阿弥陀仏の名号は、わずか六字ですから、それほどのはたらきがあるとは思えませんが、この六字の名号にはこの上ない深い功徳や利益があり、その広大なことははかりしれません。信心を得るということも、この六字にあるのであり、それ以外にあるわ

けではありません。

善導大師は、南無阿弥陀仏の六字を釈して、帰命と発願回向と行という三つのいわれを示されました。これは、私たちのような煩悩をそなえた身であっても、阿弥陀如来に帰命すれば、かならずお救いくださるということを述べられたものです。「帰命」とは、おたすけくださいとおまかせすることであり、「発願回向」とは二心なく阿弥陀如来におまかせする衆生に、この上ない功徳を与えてくださることです。

そのため、私たちがはかり知れない昔からつくり続けてきた罪のさわりはことごとく消え、浄土に生まれてさとりをひらく仲間に入ることができるのであり、そこで南無阿弥陀仏の六字は、私たちが浄土に往生するいわれをあらわしていると知ることができま

す。このように信心とは、六字の名号のいわれをよく心得ることをいうのです。この六字のいわれを心得たものを他力の信心を得た人というのです。南無阿弥陀仏の六字には、このようなすぐれたいわれがあるのですから、疑いなく深く信じるべきです。